

須内泰子作 テーマ「迷い」④ 「祈い」

- ナレーション 淳一は、もう進路を決めなければならないこの時になっても、迷っていた。両親を早くに失い、姉と妹の 3 人暮らしの中で、自分の進みたい美術の道に踏み切れないでいた。すぐには収入になる見込みがなかったからである。
- 姉 敦子 (2 階に向かって) 淳一、綾子、ご飯よ～。2 人とも早く降りてきて。
- 妹 綾子 わあー、今夜はごちそうね。お姉ちゃん、どうして？
- 敦子 さあ、どうしてかしら？ 今夜はね、淳ちゃんの誕生日だったでしょう？ 淳一、さあ早くおあがりなさい。…どうしたの？ 元気がないわねえ。
- 綾子 お兄ちゃん、仕事のこと、まだ悩んでいるの？ さっさと決めちゃえばいいのに。
- 敦子 綾ちゃん。(たしなめる) 淳一、あなたはどうか考えているの？ 姉さんに話してくれない？
- 淳一 うん。俺、これと言って取り柄もないし、俺、…。
- ナレーション その夜、淳一は、自分の進みたい仕事のことを姉に打ち明けた。敦子は、会社勤めをしているが、高校に入り立ての妹と 3 人の生活でやりくりは精一杯であった。弟を思う気持ちはあっても、やはり淳一には人並みの会社で、それなりの生活費を入れてくれることを望んでいた。というのも、敦子は決まった人がいたが、このような事情で結婚が延び延びになってしまったこともあったからである。
- 淳一(モノローグ) 俺は、何を悩んでいるんだろう？ 普通の会社に入れば、姉ちゃんだって、安心してお嫁に行ける。綾子だって、あと 2 年、なんとか俺が面倒見れる。そうさ、入っちゃえばいいんだ。そうさ、そうなんだ。でも、でも、俺は…。やはり、それしか道はないんだろうか？ それしか…。どうにもならないんだろうか？
- ナレーション 淳一は、やはり踏み込めなかった。人生はそんなものなんだろうか？ お金、生活、それだけで決めていかなければならないものなんだろうか？ 吹っ切れない思いのまま、クリスチャンだった彼は、礼拝に出席し続けていた。彼のうちで、求める気持ちと、抑える気持ちとが、代わる代わるこみ上げてくるのをどうすることもできなかった。思い余ったある日、彼は牧師先生に相談した。
- 牧師 うーん、なるほどねえ。そうだねえ、難しい問題だねえ。で、君は、そのことを神様にどう祈っているんだい？
- 淳一 え？ どうって…。僕には姉や妹もいるし、どうって…。
- 牧師 淳一君。この問題はどうか、神様が君を愛して下さることを、お示しになろうとなさっている。私にはそう思えるんだよ。
- 淳一 は？ 僕を愛してるって？ どうしてです？ 僕はこんなに苦しんでるのに。迷ってるのに！
- 牧師 そう、君は迷っている。それも一生懸命にね。淳一君、人は誰もそんなとき、困ってしまうと思うんだ。君は本当は、やりたくないけど我慢してやろうとしているね。そして、人や周りに振り回されてしまっている。
- 美術こと、真剣に祈り続けてごらん。“神様はいつか道を開いて下さる”、そう信じてね。やりたくないこと、やりたいことをはっきりさせること。そして、本当の自由人らしく生きてごらん。
- 淳一 本当の、自由人？

牧師                   そう。やりたくないことを喜んで選ぶ。そしてそれが自然なほどになれる。やりたいことを喜んで捨てる。そしてそれを惜しんだりしない。全てを神様にお任せするんだよ。

聖書の言葉           何も思い煩わないで、あらゆる場合に感謝をもってささげる祈りと願いによって、あなた方の願い事を神に知っていただきなさい。そうすれば、人の全ての思いに勝る神の平安が、あなた方の心と思いをキリスト・イエスによって守ってくれます。(ピリピ人への手紙 4章 6節、7節)

淳一(祈り)            主よ、僕、ほんとは怖いんです、やりたいことを捨てるのが。本当は、美術学校へ進んで、絵が描きたいのです。でも主よ、あなたが僕に望んでおられる道に進みたいと思います。どうぞ、この迷いから僕を助け出してください。あなたの道を選び取る力をください。そして主よ、あなたの自由を、この者にも味わわせてください。

音楽                   (高まって――)

<完>